

## 子ども学とは何か —「子ども未来学研究」創刊号によせて—

黒田 敏夫

2005年4月に梅光学院大学子ども学部が開設された。子ども学部子ども未来学科は保育者養成を教育課程の核におき、総合的人間力をもった人間の育成、教師力をもった保育者の養成を目指して開設された。2007年4月には初等教育コースを設け、小学校教員の養成もその目的として新たに加える。子ども学部は保育者の養成と小学校教師の養成のカリキュラムをベースにして、単に資格を与えるという教育内容に留まらず子どもの問題、子どもを取り巻く問題、子ども文化、地域共同体の課題、共生社会の構築など子どもと未来社会の在り方を考えていく学部である。また「子ども」と寄り添い、「子ども」を通して社会を見つめながら新しい「子ども学」を探求していく学部である。今後、この「子ども未来学研究」において、「梅光子ども学」の研究成果と研究活動、教育活動が報告されることになる。創刊号発刊によせて、哲学を学ぶものとして、これからの「子ども学」をどのように探求して行くべきかを考えて見た。

—

「哲学とは哲学することである」といわれるように、「子どもの哲学」が果して可能か、と誰れもが思うであろう。自分の頭で考える、物事がなぜそうなるかの理由や根拠について考える、物事を総合的な視点から考えていくこと、神・人・世界について体系的に考えていくことが果して子どもにできるのだろうか。子どもがそのような哲学をすることができるとは思えない。しかし、最近の書物には「子どもの哲学」を標榜するものがかなりある。哲学から子どもを考えると、どのようなアプローチの仕方になるであろうか。子どもの存在根拠を問う、子どもの本質の普遍性について考える、子どもとは何かを考えることであろうか。最近の「子ども」についての研究を見ると、「子ども」という概念は中世にはなく、近代が作り出した概念だとするもの、子どもを取り巻く問題はその時代が生み出した問題として考えなければならないと主張されているものが多くある。時代を超えた不変的な子どもの問題として考えていくよりも時代の問題として考えていこうとしている。これらの学問の目指す方向も方法論も従来とは大きく違っている。なるほど、このような子ども学が捉える子ども観を頭に入れておかなければ子どもを取り巻く様々な社会状況の中で、それらが抱える問題を解決することはできない。この小論においては、哲学と宗教哲学を学ぶものとして、現在の「子ども学」の流れに対してどのように立ち向かっていくべきかを考え、自分なりの姿勢を見つけ出していきたいと思う。

## 二

今、日本では「子ども学」という研究領域が話題となっている。「日本子ども学会」はこのことに取り組んでいる学会である。梅光学院大学子ども学部も「子ども」という名前を冠しているように「梅光子ども学」なるものを模索している。しかし「子ども」という概念は分かっているようで分からない概念ではないだろうか。すべての人が「子ども」という存在を知っているが、それが何であるかということを明確に答えることはできない。この分かりきっていると思っている「子ども」という概念が、実は近代が作りあげた概念だったと指摘し、欧米で話題になったのがフィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生』<sup>1</sup>であった。アリエスは中世の家族史や社会史の詳細な研究をし、「子供」という意識は中世にはなく、中世社会においては「子供」と「大人」という概念の区別はなかったことを明らかにした。これは日本においても同じようなことがいわれている。当時は乳幼児の生存率が非常に低かったので子供は死ぬ可能性が高いがゆえに子供の存在と大人の存在は未分離であったといわれる。具体的には服装においても、遊びにおいても「子供らしさ」という区別は存在していなく、大人と未分離であった。「性」に関しても「子供」と「大人」に対して区別なく話題にされたという。アリエスは「子供」という概念ができてくるのは近代になってからだと考える。私たちは、子供は保護され、育てられ、教育される存在であることを当たり前と思っているが、このことは近代以降の意識であると指摘するのである。今、私たちが直面している家族と地域、学校と子供の関係も中世と近代以降とでは全く違うということである。「子供」が「大人」と分離されてきたのは近代以降であるという分析がなされる。近代化への過程が進んでいくなかで、学校に通う子供の数が増えていく。これは経済的に豊かな当時の中産階級、ブルジョアジーの家族の子供たちである。この現象を時代的に眺めると、子供たちを教育していた徒弟修業や家庭奉公が学校教育に移っていったということになるのである。学校教育の普及により、子供が家庭にもどってくるのである。中世において「子供」と「大人」の分離ができなかったのと同じく、中世の家族は私生活から社会生活全般にわたって家族と地域共同体は切り離せないものであった。近代化への過程の中で、家族は地域から離れ、血縁と情緒的なつながりを大切にす近代家族の意識が生まれた。それは同時に「子供」を大切に、「子供」に関心を向ける「大人」の誕生であり、「大人」とは分離された近代の「子供」の誕生と考えるのである。

## 三

アリエスの指摘は十分な説得力をもっている。しかし、彼の分析は中世の貴族や富裕な職人、労働層という一部の者についてのものであるということも忘れてはならない。次に「子供」の分析も詳細な資料に基づいてなされ、「子供」という意識が歴史的、社会的な産物であるということを明らかにする。そして、今私たちが「大人」とは異なった存在だと思っている「子供」の意識は近代以降の産物だということである。

「子ども」についてのこのような研究に対して、古くから「子ども」は「大人」と区別され、

特別に大切にされてきたのではないかという素朴な疑問を持つ。子どもについての思いは長い歴史と実績がある。新約聖書に「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」<sup>2</sup>と記されている。「子ども」が罪のない存在とも清い存在とも述べられていない。「子ども」は純粹無垢であるが故に祝福されるのではない。「子ども」は一人で生きていくことができなく、無知で何もできない存在である。神に頼ることしかできない存在であるが故に祝福される。祝福されるに値することを主張しない存在だからこそ祝福されるのである。原始キリスト教団においては子どもが特別な役割を果たした例はどこにもなく、このマルコによる福音書の記事はイエスから出た言葉といわれる。これがイエスの語る「子どもの普遍性」と言えよう。キリスト教の歴史において、その時代や文化の中で子どもの役割がどのようなものであったかは別に、これこそ2000年の時代を超えて語られてきた「子どもの普遍性」ではなかろうか。

次にアリエスが詳細に分析する中世の時代を思い浮かべながら、中世の神学者 アウグスティヌス(Aurelius Augustinus, 354—430)とペラギウス派との論争<sup>3</sup>を眺めてみよう。ペラギウス派は、アダムの墮罪以後の人間の原罪を否定し、人間の救いは人間に与えられている自由意志に基づくと考えた。それに対しアウグスティヌスはアダム以後、人間に入り込んだ原罪は人間の善き業(自由意志による)によるのではなく、神の恩恵によってのみ赦されると考えた。彼は神の恩恵の先行性と人の自由意志と功績の無力性を言い表すために、幼児において、神の恩恵によってのみ生かされている存在、行為において無力な存在を見ている。このようなアウグスティヌスの語る幼児の普遍性もイエス自身が語った内容に立つものであり、パウロが立ったところであり、後にルターが立ったところである。幼児についてのまとまった記述は『告白』の中にもある。人間存在の由来について彼は問いかける。しかし、彼にとっては、「知ることなしに、だれがあなたを呼びもとめることができましょう」<sup>4</sup>とやっているように絶対的存在である神の前での、わたしはといった何であるか、という問いである。アウグスティヌスは、神を呼びもとめながらたずね、信じながら呼びもとめる。神によって与えられた信仰によって呼びもとめる。彼は「まことに、主よ、私はただこれだけのことをいいたい。自分はどこからこの世にやってきたのか知らないのです。」<sup>5</sup>と問う。アウグスティヌスは幼児のとき、母や乳母を通して与えられた乳や糧、愛情は、彼女たちを通して与えられたものはすべて神から来ると考えた。アウグスティヌスも幼児が無垢で純粋な存在だとは考えない。「かわいい幼児の手足は無邪気でも、魂はけっして無邪気ではありません。私は、幼児が嫉んでいるのを見て、知っています。まだものもいえない年ごろでしたが、青白い顔にきつい目つきをして、乳兄弟をにらみつつけていました。」<sup>6</sup>と述べる。幼児が祝福されるのは神が幼児に美しさや統一と完全性を与え、生命と身体を創造されたからである。このように幼児の存在そのものや産まれたままの自然的本性が純粹で無垢であるということではなく、神によって与えられた存在と本性であるときに尊いとされるのである。人間の自然的本性それ自体を尊いとするヒューマニズム(人間中心主義)をキリスト教は徹底的に批判する。それは、ヒューマニズムは人間に本来的に備わっている自由意志によって、善き行為を積み重ねることによって神の恩恵を受けることができると考える立場であるからである。アウグスティヌスも

ルターも神の恩恵の前では人間の自由意志も行為も無力であると徹底的に説くのである。教育は人間のもって生まれた本性がよりよきものへと成長していくことを信じる立場であるが、キリスト教は神の恵みと創造の業なくしては、人間の真の成長や変化はありえないと考える。そのような意味で教育とキリスト教は相容れない論理を秘めていると言える。しかし、これは一種の極論であり、神の救いの業の前では人間の業や成長は無力であるというが、人間そのものの成長とそれを手助けする教育の業をキリスト教は否定するものではない。むしろ自己を超えた神の前に己の空しさを覚えるものが、真の人間の成長を遂げていくと考えるのである。キリスト教教育は人間性のすべてがそのまま自己肯定されながら成長していくとは考えない。人間は自己否定を介してこそ、神の力により、より高い自己肯定が与えられ、真の成長が与えられると考える。その意味で幼児は自覚的に自己否定できる存在ではない。しかし、幼児はそれ自体が無力な存在である。それ故に己を低くして神を受け入れることができる存在なのである。

#### 四

アリエスの研究以来、「子ども」という観念は近代家族の誕生の中で生まれてきたものだという指摘は、子どもについての諸現象を総体として取り扱う新たな「子ども学」の必要性を求めてきた。従来の「子ども」に属していると考えられる「子ども」の本質や普遍性、「子ども」の中の神聖、そしてその根拠を求めていく「子ども学」ではなく、ここで求められているのは、時代の中で新たに起こっている変化の総体を学際的に求めていく「子ども学」である。このような方法論は社会生態学的と呼ばれることもあるが、デカルト以来の近代合理主義の方法論を批判する。このような流れの中での発言と思われる諏訪哲二氏の考えを眺めてみよう。彼は「子どもがどのように変化しても、そういう子どもにふさわしい『正しい教育』があるはずだと強固に信じられ、子どもの新しい状況に答えられない学校バッシング、教師バッシングがヒステリックにくりかえされた。だが、80年あたりから子どもの変容を通じて私たちが気づいていたことは、教師が子どもたちに教育的力を加えられるのは、子ども（若者）たちが『児童』や『生徒』として学校に現われたときであり、自由で主体的な『個』（近代的個人）として自己主張されたらもう收拾がつかないということであった。」<sup>7</sup>と述べ、いつの時代も変わらないとする子ども観とそれにたいする変わらない教育観を批判している。子どもを收拾できないほどに変えてしまったのは近代的な個であると近代精神を批判している。そして「オレ様化」した子どもたちは80年代になって現われたと述べる。社会は「消費社会的」段階になり、教師と生徒との共同的なつながりが崩れて、市民社会的（「商品交換」的）な「個」と「個」とのつながりようになり、子どもたちはほぼ社会性を脱ぎ捨てて、それぞれの「自己」に閉じこもりはじめた。教育が学習（自己変革）を促すものではなく、戦後的な教育（啓蒙）の夢が最終的に潰えた、と氏は述べる。<sup>8</sup>確かに若者がカルトに走り、教育力を失った教員がマインドコントロール的な手法に惹かれていったのもこのころかも知れない。このように子ども自身の中で起こっている問題やその周辺で起こっている問題の根拠は従来の手法では捉えきれない問題があり、その問題の総体を眺め、その解決に取り組んでいかなければならない。しかし、ここで哲学を学ぶ者として、いくつかの疑念を感

じる。それは従来の方法論と新たな方法論の対立の問題である。言い換えればデカルト以来の近代合理主義の思想とポストモダンの議論である。「近代」や「個」についての議論はまだまだ続いている議論だと思う。子どもや子どもを取り巻く問題に向かい合い、その解決に取り組むという姿勢がなによりも必要であり、その方法論の違いは別の議論である。デカルト哲学はあらゆるものを批判吟味したあとに残る否定できない「考える我」の立場からの世界観構築の試みである。カント哲学も与えられた現象に徹底的な批判・吟味を加えるとともに、それを認識する人間の認識能力そのものを徹底的に批判吟味したものである。我々が客観と思っているものも実は主観を介したものであると考察した。キリスト教も「神」という「絶対者」の前でこそ無力な「個」の存在の意味が付与されると考えた。「個」を超えた「絶対者」の存在、「絶対者」の前での無力な「個」の存在こそ意味を持つと考える。キリスト教における「絶対者」と「個」は単なる静的な関係ではない。またいずれかが先行性をもっているというものでもない。「絶対者」と「個」の関係は歴史と世界の中で出来事(geschehen)としておこる出会い(Treffen)であり、動的な関係である。これらの哲学や宗教学、神学は現象を総体として扱う学際的な研究にとっても必要な学問である。最後に新しい「子ども学」は「子ども」と向かい合うかぎり、教育的な学問である。ソクラテスが述べているように、教育は「産婆術」である。ソクラテスは新しい人間を産みだそうとしたのではなく、青年たちが自覚的に自己変革をしていく手助けをしたのである。哲学やキリスト教は、人間は自己の無力さと自己否定を介することによってのみ、真の人間存在の意味が与えられることを教える。新しい「梅光子ども学」の探求もこのことを踏まえた歩みであることを期待する。

---

註

<sup>1</sup> フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』、みすず書房、1980年

<sup>2</sup> マルコによる福音書10章14節～15節

<sup>3</sup> アウグスティヌス『ペラギウス派論駁論集(2)』、教文館、アウグスティヌス著作集 10、1985年、210頁—215頁

<sup>4</sup> アウグスティヌス『告白』、中央公論社、59頁

<sup>5</sup> 前掲書、65頁

<sup>6</sup> 前掲書、70頁

<sup>7</sup> 諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』、中公新書、2005年、14頁—15頁

<sup>8</sup> 前掲書、214頁—215頁